

# jecon.bst とユニコード文字\*

武田史郎†

2017年7月5日

## 目次

1	はじめに	2
2	ユニコード文字を扱える T <sub>E</sub> X	2
3	以前の jecon.bst の問題	3
4	使い方	3
4.1	bib ファイル	3
4.2	jecon.bst ファイルの設定	5
4.3	tex ファイルの書き方	5
4.4	コンパイルの方法	6
4.5	ユニコード文字を利用するときの jecon.bst の動作について	6
5	例	8
5.1	引用の例	8
5.2	ユニコード文字の例	8
6	不具合・問題	9
7	その他	10

## [注] : 2017-02-22

- ユニコード文字を使えるように pbibtex を拡張したプログラムとして upbibtex があり、以下でもこの upbibtex を使います。
- 基本的には、upbibtex は pbibtex と同じ動作をするのですが、一つ動作が異なる部分があります\*1。
- このため、pbibtex では上手く参考文献が出力されていたものが、upbibtex では表示がおかしくなる場合があります。

---

\* このファイルの配布場所: <http://shiro.takeda.org/ja/tex-ja/jecon-ja.html>

† Email: [shiro.takeda@gmail.com](mailto:shiro.takeda@gmail.com)

\*1 正確に言うと、\$substring という命令の動作が upbibtex では変わってしまっています。

- 例えば、内閣府 (2011), 武田他 (2016), 中央環境審議会 (2006) という文献では、タイトルの後にカンマが二つ続いてしまいます。これは上記の問題のためです。
- これは `upbibtex` の仕様上しようがないものですので、もし上記のような問題が生じるときには、後で `bb1` ファイルを直接編集するなどして対応してください。

## 1 はじめに

- この文書は「ユニコード文字を利用している文献を `jecon.bst` で利用する」ための解説です。
- [注意] この文書は version 5.0 以降の `jecon.bst` を前提としたものです。古い `jecon.bst` ではここに書いてあることはできませんから、注意してください。
- ここで「ユニコード文字」と言っているのは、通常の pLaTeX (`platex`) や pBibTeX (`pbibtex`) では直接利用することができない次のような文字のことです。
  - 「草薨剛」の「薨」や「宮崎あおい」の「崎」のように JIS の第二水準を越える文字<sup>\*2</sup>。
  - 「ò」、「ö」、「ç」、「è」、「é」、「ê」のような非アスキーの欧文の文字<sup>\*3</sup>。
- 「直接利用できない」と言うのは、これらの文字を直接ファイルに書くことはできないという意味です。直接書くということであれば pLaTeX であっても利用することができます。例えば「ò」であれば `\{o}` という命令によって表示できます (実際、多くの人がこの方法を利用していると思います)。また、「崎」であれば OTF パッケージを利用して `\UTF{FA11}` と書くことで表示できます。
- 「ユニコード文字を利用する」というのは上記のような文字を直接文献ファイル内で (もちろんその前提として `tex` ファイルでも) 利用することを指しており、この文書はそのような場合での `jecon.bst` の利用方法の解説です。
- [注意] 私はあまり文字コードや TeX の仕組みに詳しくありません (文字コード、文字集合、符号化方式等の概念をよくわかっていません)。文字コードについての記述には不正確な記述が多いかもしれませんので注意してください。
- この文書はユニコード文字を `jecon.bst` で利用する場合の説明です。他の `bst` ファイルを利用する場合や、そもそも BibTeX は使わずに `biblatex` を使うときなどは方法が変わってくると思います。また、本格的な多言語化の方法を説明する文書でもありません。「日本語で論文を書くので、引用する文献として日本語と英語の文献を引用する。ただ、少し特殊な文字も利用したい」という程度の人のための話です。

## 2 ユニコード文字を扱える TeX

- BibTeX でユニコード文字を扱うにはそもそも TeX (LaTeX) がユニコード文字を扱うことができる必要があります。現在、ユニコード文字を利用できる TeX としては XeLaTeX、LuaLaTeX、そして pLaTeX を拡張した upLaTeX 等があります。
- このファイルでは `tex` ファイルのコンパイルには XeLaTeX (`xelatex`) を利用します。`xelatex` を選んだのはなんとなくで特に理由があるわけではないです。そもそも 3 つの違いがよくわかっていませ

<sup>\*2</sup> <https://texwiki.texjp.org/?upTeX%2CupLaTeX>

<sup>\*3</sup> アスキー文字とは、例えば <http://e-words.jp/p/r-ascii.html> に掲載されている 128 個の文字のことです。

ん。

- BibTeX のコマンドとしては upLaTeX に付属の `upbibtex` を利用します。ユニコード対応の BibTeX としては `bibtexu` もありますが、ここでは `is.kanji.str$` 命令がないといけないので、`upbibtex` でないとだめです。
- [注意] pLaTeX でも `-kanji=utf-8` というオプションを付けて実行することで、ユニコード (UTF-8) を扱えるという説明がされることがありますが、これはファイルの文字コードとしてのユニコード (UTF-8 等) を扱えるということであり、ユニコード文字を扱えるということではないです。

### 3 以前の `jecon.bst` の問題

- Version 5.0 より前の `jecon.bst` ではユニコード文字の利用を全く想定していなかったため、文献内でユニコード文字を使うといろいろな問題が生まれました。ただ必ず問題が起こるというわけではなく、特に問題なく使える場合もあります。どういうときに問題が生じるかを説明しておきます。
- まず、pLaTeX に付属の `pbibtex` コマンドはそもそもユニコード文字を適切に処理できませんから、BibTeX のコマンドとして `pbibtex` を利用するとまともな出力になりません。具体的にはユニコード文字を書いた部分は抜け落ちる (消える) か、文字化けしてしまうと思います。
- これに対し、ユニコード文字に対応した upLaTeX 付属の `upbibtex` コマンドを利用すればユニコード文字が抜け落ちたり、文字化けしたりという問題はなくなります。
- さらに、ユニコード文字と言っても、漢字のみを文献で利用している場合には、「これまでの `jecon.bst + upbibtex + uplatex`」という組み合わせで、ユニコード文字を使っていないときと同様に上手く処理できます。つまり、ユニコード文字と言っても漢字のみを利用しているときには、単に `pbibtex` の代わりに `upbibtex` (そして、`platex` の代わりに `uplatex`) を用いればいいだけです。
- 問題があるのは、欧文の文献でユニコード文字、つまり、「ò」、「ö」、「ç」、「è」、「é」、「ê」のような文字を利用している場合です。この場合に「これまでの `jecon.bst + upbibtex`」で処理をしようとする、その文献を日本語の文献として処理してしまうという問題が生じます。`upbibtex` には日本語が含まれるかどうかを判断するための `is.kanji.str$` という命令がありますが、それが「ò」のような文字も日本語として判断してしまうためです\*4。
- 以下では、文献の中で欧文のユニコード文字 (「ò」、「ö」、「ç」、「è」、「é」、「ê」等) を利用しているときでも適切に扱うための手順を説明します。

## 4 使い方

### 4.1 bib ファイル

まず、bib ファイルの書き方を説明します。

その 1 : author 名等の書き方

---

\*4 `is.kanji.str$` は名前からすると漢字か漢字じゃないかを判断する命令のように見えますが、厳密にはアスキー文字か非アスキー文字かを判断しているようです。ですので、「ò」と漢字はどちらも非アスキー文字で区別できません。

- まず、bib ファイルで author 等を書くときに常に「姓，名」という形式で書いてください。
- bib ファイルで人名を書くときに日本語の文献では

```
author = {伊藤 元重 and 大山 道広}
```

のように「姓 名」という形式で書くことが普通ですが、英語の文献と同様の形式（「姓，名」）で書いてください\*5。つまり、次のように指定してください。

```
author = {伊藤，元重 and 大山，道広}
```

もし author が「P.A. サミュエルソン」なら次のようにします。

```
author = {サミュエルソン，P.A.}
```

- author 名だけではなく、人名を指定する全てのフィールド（editor、yomi、translator 等）で同じように指定してください。

## その 2 : language フィールドの追加

- 日本語の文献には必ず language フィールドというフィールドを追加し、その値に「ja」（あるいは「日本語」）を指定してください。language = {ja}（あるいは、language = {日本語}）というようにです\*6。
- 「日本語の文献」とは中身が日本語で書かれた文献のことです。外国人が書いたものでも、邦訳書は日本語の文献です。
- language フィールドの値が ja のときに jecon.bst は日本語の文献と判断します。よって、language フィールドが適切に指定されていないと適切な処理がおこなわれません。
- [注意] language フィールドの値が ja なら日本語文献と判断するというルールは単に私が勝手に決めたルールであって、一般的なルールではないです。language というフィールドが Mendeley や Zotero 等の文献管理ソフトにあらかじめ存在しているフィールドなので、それじゃこれを使おうかと思っただけです。別の名前のフィールドを使ってもいいのですが、その場合には jecon.bst を書き換える必要があります。

記入例：以下が文献エントリーの記入例です。

```
@Book{ito85:_inte_trad,
  author      = {伊藤，元重 and 大山，道広},
  title       = {国際貿易},
  publisher   = {岩波書店},
  year        = 1985,
  series      = {モダン・エコノミクス 14},
  language    = {ja},
```

\*5 「名 姓」も可能です。

\*6 「ja」という指定でも、「日本語」でもどちらでもいいのですが、以下の説明では「ja」という指定を使うものとして説明します。

```
yomi          = {いとう, もとしげ and おおやま, みちひろ}
}
```

このファイルで bib ファイルとして利用している `unicode-example.bib` と `jecon-example-reverse.bib` の二つも書き方の参考にしてください。 `unicode-example.bib` の方でユニコード文字を利用しています。

## 4.2 jecon.bst ファイルの設定

`jecon.bst` の以下の部分を変更します。

その 1 : `bst.sei.mei.order` 関数の書き換え

- `bst.sei.mei.order` 関数の中身を以下のように非ゼロに書き換えます。

```
FUNCTION {bst.sei.mei.order}
{ #1 }
```

- こう書き換えるのは bib ファイルで日本語の著者名でも英語と同じように「姓, 名」という順序で指定するようにしているためです。

その 2 : `bst.use.unicode` 関数

- `bst.use.unicode` 関数の中身を以下のように書き換えます。

```
bst.use.unicode
{ #1 }
```

- ユニコード文字を扱いたいときにはこのように `bst.use.unicode` に非ゼロを設定します。

`jecon.bst` に上の二つの修正を加え、さらに `bst.use.bysame` を以下のように書き換えたものが、このファイルで利用している `jecon-unicode.bst` です (注 : `bst.use.bysame` は書き換える必要はないです)。

```
bst.use.bysame
{ #2 }
```

## 4.3 tex ファイルの書き方

- プリアンプルの設定
  - このファイル (`jecon-unicode-xelatex.tex`) は XeLaTeX (`xelatex`) を利用することを前提としています。プリアンブルの設定も `xelatex` でコンパイルすることを前提として記述されています。
  - XeLaTeX を利用したい人はこのファイルを読んで書き方の参考にしてください。
- `bibliographystyle` や `bibliography` の指定
  - `bibliographystyle` や `bibliography` の指定は普通と同じようにすればよいです。

- このファイルでは以下の設定にしています。

```
\bibliographystyle{jecon-unicode}
\bibliographystyle{../jecon-example-reverse,unicode-example}
```

つまり、bst ファイルには jecon-unicode.bst を、bib ファイルには unicode-example.bib と jecon-example-reverse.bib の二つを指定しています。後者のファイルは一個上のフォルダに置いてあるものを利用するので、「../」を付けています\*7。このファイルも同じフォルダに置くなら単純に以下のように書けばよいです。

```
\bibliographystyle{jecon-example-reverse,unicode-example}
```

#### upLaTeX や LuaLaTeX を使いたいとき

- プリアンプルさえ書き換えれば upLaTeX や LuaLaTeX でも同様にコンパイルできると思います。
- プリアンプルの書き方については、このファイルと一緒に配布されている jecon-unicode-uplatex.tex や jecon-unicode-lualatex.tex を参考にしてください。

#### 4.4 コンパイルの方法

- このファイルをコンパイルするときには以下の2つのファイルを同じフォルダに置いてください。
  - jecon-unicode.bst
  - unicode-example.bib
- また、jecon-example-reverse.bib というファイルを一個上の階層のフォルダに置いてください。
- コンパイルはコマンドラインであれば次のようにおこないます。

```
xelatex jecon-unicode-xelatex.tex
upbibtex jecon-unicode-xelatex
xelatex jecon-unicode-xelatex.tex
xelatex jecon-unicode-xelatex.tex
```

T<sub>E</sub>X のコマンドとしては xelatex を、BibT<sub>E</sub>X のコマンドとしては upbibtex を利用し、xelatex を1回、次に upbibtex を1回、そして xelatex をさらに2回実行するということです。

#### 4.5 ユニコード文字を利用するときの jecon.bst の動作について

- 以下は jecon.bst がどのように動作しているかについての説明です。別に知らなくてかまいません。
- 第3節で書きましたが、upbibtex では is.kanji.str\$ という命令によってその文字が日本語かどうかを判別するのですが、「ò」、「ö」、「ç」、「è」、「é」、のような文字も日本語として判断してしまいます。
- このようにユニコード文字が含まれるケースでは is.kanji.str\$ という命令で日本語か日本語じゃないかを正しく判断することができないため、jecon.bst では language フィールドを利用して判断を

---

\*7 「../」は一個上のフォルダを表す記号です。

します。具体的には、その文献の `language` フィールドに `ja` という値が指定されていれば日本語の文献（なければ英語の文献）というように判断します。

- ただ、日本語の文献であっても（つまり、`language` に `ja` が指定されていても）著者名がアルファベットで指定される文献がありますので、著者名の部分についてはさらに日本語で記述されているか、アルファベットで記述されているかを自動で判断します。ただし、この判断の仕組みが完全ではないので文献によっては判断を間違えます。
- 例えば、文献の中に `Ôö · Smith (5555)` という文献があります（これは例のためにつくった架空の文献です）。この文献は

```
@article{sample-test,
  title      = {サンプルの論文：日本語のタイトル},
  author     = {Ôö, Caaaaa and Smith, James},
  journal    = {経済学の雑誌},
  volume    = 0909,
  number    = 909,
  pages     = {1--1111},
  year      = 5555,
  language  = {ja}
}
```

というように登録されています。`language` に `ja` が指定されていますので日本語の文献として処理されますが、著者名については「`Ôö, Caaaaa and Smith, James`」のようにアルファベットなので、本来著者名の扱いは英語の著者名と同じようにすることになっています。よって、引用部分では「`Ôö and Smith (5555)`」のように表示されないといけないのですが、実際には区切文字に日本語用の「`・`」が利用されており、日本語の著者名として扱われてしまっています。

- これは著者名が日本語かアルファベットかを判断する方法が不完全なためです。具体的に言うと、今使っている判断基準では第一著者の「姓」の一番最初の文字と一番最後の文字がともに非アスキー文字であると日本語で記述されていると判断します。この文献の場合「`Ôö`」が第一著者の姓ですが、一番最初の文字（つまり、`Ô`）も一番後の文字（つまり、`ö`）もどちらも非アスキー文字ですので、日本語名と判断します。
- もう少しちゃんとした判断基準にすれば正確な判断ができると思いますが、多くのケースでは上手く判断できていますし（姓の一番最初と一番最後の文字がどちらも非アスキー文字のアルファベット名はめったにないです）\*8、複雑なコードを書くのが面倒なので放置しています。
- 同じように日本語文献ですが、著者名はアルファベットのものとして `Ryza et al. (2016)` がありますが、こちらについては著者名はアルファベットとして正常に扱われています。

---

\*8 アルファベット名といっても、ローマ字ではなくギリシャ文字やキリル文字を利用しているときは別ですが。

## 5 例

### 5.1 引用の例

以下は引用の例です。

Ööö and Smith (6666), Öö · Smith (5555), Óò et al. (2200), Óò et al. (2199), Ryza et al. (2016), Ryza et al. (2015), 有村 · 杉野 (2015), 宮崎 (2015b), 宮崎 (2015a), Krey et al. (2014), Yamazaki and Takeda (2013), Chang (2013), 武田 (2013), Takeda et al. (2012), 有村 · 武田 (2012), Matloff (2012), Boswell and Foucher (2012), 武田 (2012), 有村他 (2012), 森 (2012), Takeda et al. (2011b), Takeda et al. (2011a), 有村他 (2011), Jaeger et al. (2011), Takeda (2010), 武田他 (2010), Adès et al. (2010), 松浦 (2010), Yamasue et al. (2009), ThoughtWorks Inc. (2008), Babiker and Eckaus (2007), Takeda (2007), Yamasue et al. (2007), Böhringer and Jochem (2007), Åhman et al. (2007), 横溝 (2007), Böhringer and Löschel (2006), 中央環境審議会 (2006), 瀧川 · 前田 (2006), Bouët et al. (2006), Babiker and Rutherford (2005), Mcconnell and Bockstael (2005), 総務省 (2004), Antràs and Helpman (2004), Ishikawa and Kiyono (2003), Brooke et al. (2003), 服部他 (2002), 宮沢 (2002), 石川 (2002), Löschel (2002), 井堀 (2002), Leisch (2002), 服部 · 南山 (2001), 片山 (2001), Babiker et al. (2000), Rutherford and Paltsev (2000), 服部 · 石田 (2000), ハント · デビッド (2000), 中村 (2000), Fujita et al. (1999), Babiker et al. (1999), マークセン他 (1999), 大山 (1999), Iregui et al. (1999), 田中 (1999), Maggi and Rodríguez-Clare (1998), 黒田他 (1997), パロー (1997), 資源エネルギー庁長官官房企画調査課 (1997), Wong (1995), Ishikawa (1994), Brezis et al. (1993), 清野 (1993), Krugman (1991a), Helpman and Razin (1991), Krugman (1991b), 岩本 (1991), 西村 (1990), 内田 (1990), Wang et al. (1989), 伊藤 · 大山 (1985), Lucas (1976), 今井他 (1972), 今井他 (1971), Milne-Thomson (1968), サミュエルソン (1967), Allais (1953),

### 5.2 ユニコード文字の例

- ファイルでは記述されていても、PDF にしたときに表示されない文字（空白になったりバツ印になったりします）がいくつかあります。XeLaTeX、LuaLaTeX、upLaTeX のどれを使うか、どのような設定がされているか、どんなフォントがインストールされているかによって表示される文字が変わるようです。私の環境では LuaLaTeX を利用しているときが表示される文字が一番多いです。
- Hallo Wörlđ, Französische Sprache.
- 弑、丐、丕、个、卍、丷、井、丿、乂、乖乘、亂、丿、豫、爭、舒、弑、于、亞、亟、一、亢、京、毫、亶、从、仍、仄、仆、仿
- (楸, (栢), (代), キロ, ズ)
- ①③⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳, ,
- 人名
  - 草薨剛 vs 草なぎ剛
  - 高村薫 vs 高村薫
  - 内田百閒 vs 内田百間
  - 宮崎あおい vs 宮崎あおい
  - 元藤燐子 vs 元藤あき子



- フランス語: René Descartes, né le 31 mars 1596 à La Haye en France, et mort le 11 février 1650 à Stockholm, est un mathématicien, physicien et philosophe français. Il est considéré comme l'un des fondateurs de la philosophie moderne.
- ドイツ語: Albert Einstein gilt als Inbegriff des Forschers und Genies. Er nutzte seine außerordentliche Bekanntheit auch außerhalb der naturwissenschaftlichen Fachwelt bei seinem Einsatz für Völkerverständigung und Frieden. In diesem Zusammenhang verstand er sich selbst als Pazifist, Sozialist und Zionist.
- Wikipedia の言語名: , Acèh, , Afrikaans, Alemannisch, , Aragonés, Ænglisc, , , , Asturianu, Aymar aru, Azərbaycanca, , , Boarisch, Žemaitėška, Bikol Central, , ( ), , Bahasa Banjar, , , Brezhoneg, Bosanski, , , Català, Chavacano de Zamboanga, Mìng-dǝng-nḡ, , Cebuano, Chamoru, , , Qırımtatarca, Čeština, Kaszëbsczi, / , , Cymraeg, Dansk, Deutsch, Zazaki, Dolnoserbski, , E egbe, E , Emiliàn e rumagnòl, English, Esperanto, Español, Eesti, Euskara, Estremeñu, , Suomi, Võro, Føroyskt, Français, Arpetan, Nordfriisk, Furlan, Frysk, Gaeilge, Gagauz, 贛語, Gàidhlig, Galego, Avañe'ẽ, / Göychi Konknni, , Gaelg, Hausa, 客家語/Hak-kâ-ngî, Hawai'i, , , Fiji Hindi, Hrvatski, Hornjoserbsce, Kreyòl ayisyen, Magyar, , Interlingua, Bahasa Indonesia, Interlingue, Ilokano, Ido, Íslenska, Italiano, /inuktitut, La .lojban., Basa Jawa, , Qaraqalpaqsha, Taqbaylit, , Kongo, Gĩkũyũ, , Kalaallisut, , ☒☒☒, , - , Kurdî, , Kernowek, , Latina, Lëtzebuergesch, , Limburgs, Ligure, Lumbaart, Lingála, , , Lietuvių, Latgaļu, Latviešu, , Malagasy, , Māori, Baso Minangkabau, , , , Bahasa Melayu, Malti, Mirandés, , , Dorerin Naoero, Nāhuatl, Napulitano, Plattdüütsch, Nedersaksies, , , Nederlands, Norsk nynorsk, Norsk bokmål, Novial, Nouormand, Sesotho sa Leboa, Diné bizaad, Occitan, Oromoo, , , Kapampangan, Papiamentu, Picard, Deitsch, , Norfuk / Pitkern, Polski, Piemontèis, , , Português, Runa Simi, Rumantsch, Română, Tarandíne, , , Kinyarwanda, , , Sardu, Sicilianu, Scots, , Sámeigiella, Srpskohrvatski / , , Simple English, Slovenčina, Slovenščina, Gagana Samoa, ChiShona, Soomaaliga, Shqip, / srpski, Sranantongo, SiSwati, Sesotho, Seeltersk, Basa Sunda, Svenska, Kiswahili, Ślůnski, , Tetun, , , Türkmençe, Tagalog, Tok Pisin, Türkçe, /tatarça, Chi-Tumbuka, Twi, Reo tahiti, , / Uyghurche, , , O zbekcha/ , Vèneto, Vepsän kel' , Tiếng Việt, West-Vlams, Volapük, Winaray, Wolof, ☒☒, , IsiXhosa, , , Yorùbá, Vahcuengh, Zeëuws, 中文, 文言, Bân-lâm-gú, ☒語, IsiZulu,

## 6 不具合・問題

- 本来、ユニコード文字と言ったら、ローマ字、日本の漢字はもちろん、中国・台湾の漢字、ハングル、ギリシャ文字、キリル文字、アラビア文字等、様々な文字が対象になるのですが、jecon.bst では日本の文字（漢字）とローマ字くらいしか考慮していません。他の文字を利用するといろいろ問題が生じると思います。

## 7 その他

- 宮崎 (2015a) と 宮崎 (2015b) は XeLaTeX や BibTeX の使い方について解説しています。XeLaTeX を利用したい人には参考になると思います。私も参考にさせていただきました。

## 参考文献

- Adès, Julie, Jean-Thomas Bernard, and Patrick Gonzalez (2010) “Energy Use and GHG Emission of the Québec Pulp and Paper Industry : An Econometric Analysis.”
- Allais, Maurice (1953) “Le Comportement de l’Homme Rationnel devant le Risque: Critique des Postulats et Axiomes de l’École Américaine,” *Econometrica*, Vol. 21, No. 4, pp. 503–546, DOI: <http://dx.doi.org/10.2307/1907921>.
- Antràs, Pol and Elhanan Helpman (2004) “Global Sourcing,” DOI: <http://dx.doi.org/10.1086/383099>.
- Babiker, Mustafa H. and Richard S. Eckaus (2007) “Unemployment Effects of Climate Policy,” *Environmental Science and Policy*, Vol. 10, No. 7-8, pp. 600-609, DOI: <http://dx.doi.org/10.1016/j.envsci.2007.05.002>.
- and Thomas F. Rutherford (2005) “The Economic Effects of Border Measures in Subglobal Climate Agreements,” *Energy Journal*, Vol. 26, No. 4, pp. 99-126.
- , John M. Reilly, and Henry D. Jacoby (1999) “The Kyoto Protocol and Developing Countries,” October, MIT Joint Program on the Science and Policy of Global Change (Report No.56).
- , ——— , and ——— (2000) “The Kyoto Protocol and Developing Countries,” *Energy Policy*, Vol. 28, No. 8, pp. 525–536, DOI: [http://dx.doi.org/10.1016/S0301-4215\(00\)00033-1](http://dx.doi.org/10.1016/S0301-4215(00)00033-1).
- Bouët, Antoine, Lionel Fontagné, and Sébastien Jean (2006) “Is Erosion of Tariff Preferences A Serious Concern?” in Anderson, Kym, Will Martin, Kym Anderson, and Will Martin eds. *Agricultural Trade Reform and the Doha Development Agenda*, Washington D.C.: World Bank, Chap. 6, pp. 161-192.
- Brezis, Elise S., Paul R. Krugman, and Daniel Tsiddon (1993) “Leapfrogging in International Competition: A Theory of Cycles in National Technological Leadership,” *American Economic Review*, Vol. 83, No. 5, pp. 1211-1219, December, URL: <http://www.jstor.org/stable/2117557>.
- Brooke, Anthony, David Kendrick, Alexander Meeraus, and Ramesh Raman (2003) *GAMS: A User’s Guide*, GAMS Development Corporation.
- Böhringer, Christoph and Patrick Jochem (2007) “Measuring the immeasurable: A survey of sustainability indices,” *Ecological economics*, Vol. 63, No. 1, pp. 1–8.
- and Andreas Löschel (2006) “Computable General Equilibrium Models for Sustainability Impact Assessment: Status Quo and Prospects,” *Ecological Economics*, Vol. 60, No. 1, pp. 49–64, nov, DOI: <http://dx.doi.org/10.1016/j.ecolecon.2006.03.006>.
- Chang, Winston (2013) 『R グラフィックスクックブック—ggplot2 によるグラフ作成のレシピ集』, 石井弓

- 美子・河内崇・瀬戸山雅人・古島敦訳, オライリージャパン.
- De Gorter, Harry and Johan Swinnen (2002) “Political Economy of Agricultural Policy,” in Gardner, B. and G. Rausser eds. *Handbook of Agricultural Economics*, Vol. 2: Elsevier Science B.V. Chap. 36, pp. 1893–1943, URL: <http://www.sciencedirect.com/science/article/pii/S1574007202100235>, DOI: [http://dx.doi.org/10.1016/S1574-0072\(02\)10023-5](http://dx.doi.org/10.1016/S1574-0072(02)10023-5).
- Fujita, Masahisa, Paul R. Krugman, and Anthony J. Venables (1999) *The Spatial Economy*, Cambridge, MA: MIT Press, (小出, 博之訳, 『空間経済学』, 東洋経済新報社, 2000年) .
- 服部保・石田弘明 (2000) 「宮崎県中部における照葉樹林の樹林面積と種多様性, 種組成の関係」, 『日本生態学会誌』, 第 50 巻, 221-234 頁.
- ・南山典子 (2001) 「九州以北の照葉樹林フロラ」, 『人と自然』, 第 12 巻, 91-104 頁.
- ・石田弘明・小舘誓治・南山典子 (2002) 「照葉樹林フロラの特徴と絶滅のおそれのある照葉樹林構成種の現状」, 『ランドスケープ研究』, 第 65 巻, 609–614 頁.
- Helpman, Elhanan and Assaf Razin eds. (1991) *International Trade and Trade Policy*, Cambridge, MA: MIT Press.
- Iregui, Ana María, Estudios Económicos, Banco de la República, and Colombia Bogotá (1999) “Efficiency Gains from the Elimination of Global Restrictions on Labour Mobility: an Analysis Using a Multiregional CGE Model.”
- Ishikawa, Jota (1994) “Revisiting the Stolper-Samuelson and the Rybczynski Theorems with Production Externalities,” *Canadian Journal of Economics*, Vol. 27, No. 1, pp. 101-111, URL: <http://www.jstor.org/stable/135804>.
- and Kazuharu Kiyono (2003) “Greenhouse-Gas Emission Controls in an Open Economy,” November, COE-RES Discussion Paper Series, Center of Excellence Project, Graduate School of Economics and Institute of Economics Research, Hitotsubashi University.
- Jaeger, Carlo C., Joan David Tàbara, Diana Mangalagu, Roland Kupers, Antoine Mandel, Frank Meißner, and Wiebke Lass (2011) *A New Growth Path for Europe. Generating Prosperity and Jobs in the Low-Carbon Economy Synthesis Report*.
- 片山恭一 (2001) 『世界の中心で愛を叫ぶ』, 小学館.
- Krey, V., O. Masera, G. Blanford, T. Bruckner, R. Cooke, K. Fisher-Vanden, H. Haberl, E. Hertwich, E. Kriegler, D. Mueller, S. Paltsev, L. Price, S. Schlömer, D. Ürges Vorsatz, D. van Vuuren, and T. Zwickel (2014) “Annex II: Metrics & Methodology,” *Climate Change 2014: Mitigation of Climate Change. Contribution of Working Group III to the Fifth Assessment Report of the Intergovernmental Panel on Climate Change*, pp. 1281–1328.
- Krugman, Paul R. (1991a) *Geography and Trade*, Cambridge, MA: MIT Press.
- (1991b) “Is Bilateralism Bad?” in Helpman, Elhanan and Assaf Razin eds. *International Trade and Trade Policy*, Cambridge, MA: MIT Press, pp. 9-23.
- Leisch, Friedrich (2002) “Sweave: Dynamic Generation of Statistical Reports Using Literate Data Analysis,” in Härdle, Wolfgang and Bernd Rönz eds. *Compstat*, Heidelberg: Physica-Verlag HD, pp. 575–580, URL: [http://link.springer.com/10.1007/978-3-642-57489-4\\_89](http://link.springer.com/10.1007/978-3-642-57489-4_89).
- Jr., Robert E. Lucas (1976) “Econometric Policy Evaluation: A Critique,” in *The Phillips Curve and Labor Markets*, Vol. 1 of Carnegie Rochester Conference Series on Public Policy, Amsterdam: North-

- Holland, pp. 19-46.
- Löschel, Andreas (2002) “Technological Change in Economic Models of Environmental Policy: a Survey,” *Ecological Economics*, Vol. 43, No. 2-3, pp. 105–126, dec, DOI: [http://dx.doi.org/10.1016/S0921-8009\(02\)00209-4](http://dx.doi.org/10.1016/S0921-8009(02)00209-4).
- Maggi, Giovanni and André Rodríguez-Clare (1998) “The Value of Trade Agreements in The Presence of Political Pressures,” *Journal of Political Economy*, Vol. 106, No. 3, pp. 574–601.
- McConnell, Kenneth E. and Nancy E. Bockstael (2005) “Valuing the Environment as a Factor of Production,” in Mäler, Karl-Göran and Jeffrey R. Vincent eds. *Handbook of Environmental Economics*, Amsterdam: North-Holland, Chap. 14, pp. 517–570.
- Milne-Thomson, L. M. (1968) *Theoretical Hydrodynamics*, 5th edition, p. 480, London: MacMillan Press.
- 西村和雄 (1990) 『ミクロ経済学』, 東洋経済新報社.
- Parry, Ian W. H. (1997) “Environmental Taxes and Quotas in the Presence of Distorting Taxes in Factor Markets,” *Resource and Energy Economics*, pp. 5–6, URL: <http://linkinghub.elsevier.com/retrieve/pii/S0928765596000127>, DOI: <http://dx.doi.org/10.2139/ssrn.293599>.
- Peri, Giovanni (2007) “Immigrants’ Complementarities and Native Wages: Evidence from California,” Technical report, National Bureau of Economic Research, Cambridge, MA, URL: <http://www.nber.org/papers/w12956.pdf>, DOI: <http://dx.doi.org/10.3386/w12956>.
- Rutherford, Thomas F. and Sergey V. Paltsev (2000) “GTAPinGAMS and GTAP-EG: Global Datasets for Economic Research and Illustrative Models,” September, URL: <http://www.mpsge.org/gtap5/index.html>, accessed on 29th June, 2013, Working Paper, University of Colorado, Department of Economics.
- Ryza, Sandy, Uri Laserson, Sean Owen, and Josh Wills (2015) *Advanced Analytics with Spark Patterns for Learning from Data at Scale*: O’reilly & Associates Inc.
- , ———, ———, and ——— (2016) 『Spark による実践データ解析—大規模データのための機械学習事例集』, 石川有監訳, Sky 株式会社・玉川竜司訳, オライリージャパン.
- Takeda, Shiro, Toshi H. Arimura, and Makoto Sugino (2011a) “Labor Market Distortions and Welfare—Decreasing International Emissions Trading,” URL: [http://papers.ssrn.com/sol3/papers.cfm?abstract\\_id=1886200](http://papers.ssrn.com/sol3/papers.cfm?abstract_id=1886200), accessed on 29/06/2013.
- , ———, Hanae Tamechika, Carolyn Fischer, and Alan K. Fox (2011b) “Output Based Allocation of Emissions Permits for Mitigating the Leakage and Competitiveness Issues for Japanese Economy,” URL: <http://rff.org/Publications/Pages/PublicationDetails.aspx?PublicationID=21652>, RFF (Resources for the Future) Discussion Paper 11-40, September 2011.
- , Horie Tetsuya, and Toshi H. Arimura (2012) “A CGE Analysis of Border Adjustments under the Cap-and-Trade System: A Case Study of the Japanese Economy,” *Climate Change Economics*, Vol. 3, No. 1, URL: <http://www.worldscientific.com/doi/abs/10.1142/S2010007812500030>, DOI: <http://dx.doi.org/10.1142/S2010007812500030>.
- ThoughtWorks Inc. (2008) 『ThoughtWorks アンソロジー—アジャイルとオブジェクト指向によるソフトウェアイノベーション』, オブジェクトの広場編集部株式会社オーグス総研訳, オライリージャパン.
- Wang, S. K., C. A. Blomquist, and B. W. Spencer (1989) “Modeling of Thermal and Hydrodynamic

- Aspects of Molten Jet/Water Interactions,” in *ANS Proc. 1989 National Heat Transfer Conference*, Vol. 4, pp. 225-232, Philadelphia, September 6.
- Wong, Kar-yiu (1995) *International Trade in Goods and Factor Mobility*, Chap. 2, pp. 23-84, Cambridge, MA: MIT Press.
- Yamasue, Eiji, Kenichi Nakajima, Ichiro Daigo, Seiji Hashimoto, Hideyuki Okumura, and Keiichi N. Ishihara (2007) “Evaluation of the Potential Amounts of Dissipated Rare Metals from WEEE in Japan,” *Materials transactions*, Vol. 48, No. 9, pp. 2353–2357, URL: <http://ci.nii.ac.jp/naid/10019853407/>.
- , Ryota Minamino, Ichiro Daigo, Hideyuki Okumura, and Keiichi N Ishihara (2009) “Evaluation of total materials requirement for the recycling of elements and materials (urban ore TMR) from end-of-life electric home appliances,” *Materials Transactions*, Vol. 50, No. 9, pp. 2165–2172, URL: <http://ci.nii.ac.jp/naid/40016713752/>.
- Yamazaki, Masato and Shiro Takeda (2013) “An assessment of nuclear power shutdown in Japan using the computable general equilibrium model,” *Journal of Integrated Disaster Risk Management*, Vol. 3, No. 1, DOI: <http://dx.doi.org/10.5595/idrim.2013.0055>.
- Åhman, Markus, Dallas Burtraw, Joseph Kruger, and Lars Zetterberg (2007) “A Ten-Year Rule to Guide the Allocation of EU Emission Allowances,” *Energy Policy*, Vol. 35, No. 3, pp. 1718–1730, mar, DOI: <http://dx.doi.org/10.1016/j.enpol.2006.04.007>.
- Óð, OðÁÖØÁÖØÖØ, ÒËÑ Đð, ÇÒÒ Óðóný, and Ñ Ýò (2199) “ÀÁÀÄÄÄ, ÅÆÇÈÉ, ÊË, ÌÍÎĐ, Sample,” *ĞğĞğĤĥĤĥİiİiJjİiJj*, Vol. 100, No. 20, pp. 1-1000.
- , ———, ———, and ——— (2200) “aaaÀÁÄÄÄ, ÅÆÇÈÉ, ÊË, ÌÍÎĐ, Sample,” *ĞğĞğĤĥĤĥİiİiJjİiJj*, Vol. 100, No. 20, pp. 1-1000.
- Ôö, Caaaaa · James Smith (5555) 「サンプルの論文：日本語のタイトル」, 『経済学の雑誌』, 第0909巻, 第909号, 1–1111頁.
- Ööö, Caaaaa and James Smith (6666) “Sample Article: ööö,” *Economics*, Vol. 0909, No. 909, pp. 1–1111.
- 有村俊秀・武田史郎（編）（2012）『排出量取引と省エネルギーの経済分析：日本企業と家計の現状』, 日本評論社.
- · 杉野誠（2015）「温室効果ガス排出削減の方法：経済的手法の役割（特集気候変動：未来選択に向けて）」, 『環境情報科学』, 第44巻, 第1号, 36-43頁, URL : <http://ci.nii.ac.jp/naid/40020418914/>.
- · ——— · 武田史郎（2011）「国内排出量取引の国際リンクによる経済的影響に関する研究 – 応用一般均衡分析によるアプローチ（特集政策大競争時代の環境経済研究）」, 『環境研究』, 第161号, 95-102頁, 5月, URL : <http://ci.nii.ac.jp/naid/40018847518/>.
- 石川城太（2002）「環境政策と国際貿易」, 池間誠・大山道広（編）『国際日本経済論』, 文眞堂, 第7章, 114-129頁.
- 伊藤元重・大山道広（1985）『国際貿易』, モダン・エコノミクス 14, 岩波書店.
- 今井賢一・宇沢弘文・小宮隆太郎・根岸隆・村上泰亮（1971）『価格理論 I』, 岩波書店.
- · —— · —— · —— · —— （1972）『価格理論 II』, 岩波書店.
- 岩本康志（1991）「配当課税制度廃止の経済的効果 — 89年法人税改革の分析 —」, 『経済研究』, 第42巻, 第2号, 127-138頁, 4月.
- 内田百閒（1990）『冥途・旅順入城式』, 岩波文庫, 岩波書店.

- 大山道広 (1999) 「市場構造・経済厚生・国際貿易」, 岡田章・神谷和也・柴田弘文・伴金美 (編) 『現代経済学の潮流 1999』, 東洋経済新報社, 3-34 頁.
- 清野一治 (1993) 『規制と競争の経済学』, 27-31 頁, 東京大学出版会, 東京.
- 黒田昌裕・新保一成・野村浩二・小林信行 (1997) 『KEO データベース — 産出および資本・労働投入の測定 —』, Keio Economic Observatory Monograph Series, 第 8 号, 慶應義塾大学産業研究所.
- サミュエルソン, P. A. (1967) 『経済分析の基礎』, 勁草書房.
- 資源エネルギー庁長官官房企画調査課 (編) (1997) 『総合エネルギー統計平成 8 年度版』, 通商産業研究社.
- 総務省 (編) (2004) 『平成 12 年 (2000 年) 産業連関表 — 総合解説編 —』, 財団法人全国統計協会連合会.
- 瀧川好夫・前田洋樹 (2006) 『EViews で計量経済学入門』, 日本評論社, 第 2 版.
- 武田史郎 (2007) 「貿易政策を対象とした応用一般均衡分析」, URL : <http://www.rieti.go.jp/jp/publications/summary/07030019.html>, RIETI Discussion Paper Series 07-J-010.
- (2012) 「応用一般均衡モデルによる地球温暖化対策の分析: 有用性と問題点」, 有村俊秀・蓬田守弘・川瀬剛志 (編) 『地球温暖化対策と国際貿易: 排出量取引と国境調整措置をめぐる経済学的・法学的分析』, 東京大学出版会, 第 1 章, 15-36 頁.
- (2013) 「jecon.bst: 経済学用 BibTeX スタイルファイル」, URL : <http://shiroakeda.org/ja/tex-ja/jecon-ja.html> (アクセス日: 2013 年 7 月 6 日).
- ・川崎泰史・落合勝昭・伴金美 (2010) 「日本経済研究センター CGE モデルによる CO2 削減中期目標の分析」, 『環境経済・政策研究』, 第 3 巻, 第 1 号, 31-42 頁, 1 月, URL : <http://ci.nii.ac.jp/naid/40017004376/>.
- ・山崎雅人・川崎泰史・吉岡真史 (2016) 「GTAP9 と GTAP-Power データベースの特徴」, URL : [http://www.esri.go.jp/jp/archive/e\\_rnote/e\\_rnote030/e\\_rnote026.pdf](http://www.esri.go.jp/jp/archive/e_rnote/e_rnote030/e_rnote026.pdf), ESRI Research Note No.26.
- 田中一穂 (編) (1999) 『図説日本の税制平成 11 年度版』, 財経詳報社.
- 内閣府 (2011) 「経済成長と財政健全化に関する研究報告書」, 第 3 回経済社会構造に関する有識者会議 (10 月 17 日) 資料 2.
- 中村慎一郎 (2000) 『Excel で学ぶ産業連関分析』, エコノミスト社.
- ハント, A.・T. デビッド (2000) 『達人プログラマー—システム開発の職人から名匠への道』, 村上雅章訳, ピアソンエデュケーション.
- バロー, R. J. (1997) 『経済学の正しい使用法—政府は経済に手を出すな—』, 仁平和夫訳, 東洋経済新報社.
- Boswell, Dustin and Trevor Foucher (2012) 『リーダブルコード—より良いコードを書くためのシンプルで実践的なテクニック (Theory in practice)』, 角征典訳, オライリージャパン.
- Matloff, Norman (2012) 『アート・オブ・R プログラミング』, 大橋真也監訳, 木下哲也訳, オライリージャパン, 東京.
- 松浦寿幸 (2010) 『Stata によるデータ分析入門: 経済分析の基礎からパネル・データ分析まで』, 東京図書.
- マークセン, J. R.・W. H. ケンプファー・J. R. メルヴィン・K. E. マスカス (1999) 『国際貿易—理論と実証 上』, 松村敦子訳, 多賀出版.
- 宮崎憲治 (2015a) 「学術研究のためのオープンソース・ソフトウェア (1) XELATEX (霧見誠良教授退職記念号)」, 『経済志林』, 第 82 巻, 第 4 号, 285-321 頁, 3 月, URL : <http://ci.nii.ac.jp/naid/120005614155/>.
- (2015b) 「学術研究のためのオープンソース・ソフトウェア (2) BiBTEX と Zotero」, 『経済志林』, 第 83 巻, 第 2 号, 119-149 頁, 11 月, URL : <http://ci.nii.ac.jp/naid/120005678435/>.

- 宮沢健一（編）（2002）『産業連関分析入門〈新版〉』，日本経済新聞社，第7版。
- 森鷗外（2012）『山椒大夫・高瀬舟・阿部一族』，角川文庫，角川書店。
- 横溝廣子（2007）『海野勝珉 下絵・資料集—東京芸術大学大学美術館所蔵』，東方出版。
- 中央環境審議会（2006）「CO2回収・貯留技術（CCS）について（審議経過の整理）」，8月。
- 井堀利宏（2002）『要説：日本の財政・税制』，税務経理協会。
- 有村俊秀・蓬田守弘・川瀬剛志（編）（2012）『地球温暖化対策と国際貿易：排出量取引と国境調整措置をめぐる経済学・法学的分析』，東京大学出版会。
- Takeda, Shiro (2007) “The Double Dividend from Carbon Regulations in Japan,” *Journal of the Japanese and International Economies*, Vol. 21, No. 3, pp. 336-364, September, DOI: <http://dx.doi.org/10.1016/j.jjie.2006.01.002>.
- (2010) “A CGE Analysis of the Welfare Effects of Trade Liberalization under Different Market Structures,” *International Review of Applied Economics*, Vol. 24, No. 1, pp. 75-93, DOI: <http://dx.doi.org/10.1080/02692170903424307>.